

せつぷく

中村 龍介

一九四五年八月十五日正午、ちやぶ台の上には古びた真空管式のラジオが置かれ、それを取り囲むように、父、母、祖母が神妙な顔付きで正座していた。

やがて、ラジオからは雑音に交じって、甲高く歌うような声が聞こえてきた。それをじっと聴いていた父は、頭を深く垂れ、小さくひと言つぶやいた。

「これで、せつぷくだな」と聞こえた。

当時四歳の私には、聞いたばかりの放送が重大なことを伝えるものらしいと直感したが、何が起こったのかは解らない。ましてや『せつぷく』の意味など知る由もなかった。

「戦争が終わったのよ」

母の沈んだ声に日本が負けたのだということはおぼろげに理解できた。だが、そのことと『せつぷく』がどう関係するのかは霧に包まれたままだった。

何事もなく数日が過ぎたが、『せつぷく』は喉元に刺さった小骨のように、私の頭から離れなかった。

ある時、思い余って父に尋ねた。

「ねえ、未だせつぷくしないの？」

「馬鹿なこと言うな！」

恐ろしい形相で一喝され、『せつぷく』が決して楽しいことではないと悟った。

それから七十年近くが過ぎた。加齢の所為か、最近とみに安楽死について考えるようになった。

人は自分の意思とは無関係にこの世に生を与えられる。せめて死ぬ時くらいは自分の意思で自らの人生に幕を引くことができないのだろうか。

短絡的にいえば、自殺はその目的のための最も簡便な方法かもしれない。だが、自殺は自ら命を断つことであり、その背景は甚だ暗い。大抵の自殺は、借金苦であれ、失恋であれ、絶望の果てに追い詰められた末の決断である。

あるいは、楠正成や赤穂四十七士のように、主君のために

命を賭した死も自殺のカテゴリーに入るだろう。近年では、神風特攻隊の『お国のため』や、三島由紀夫の劇的な最後のように、報国や憂国の思いから自らの命と引き換えに一種の美学を演出した死に方も含まれるだろう。

動機は何であれ、自殺は自らの命を断つことで何らかの自己主張をしている。その主張の中身には、憎しみ、恋慕、お詫び、報国、美学、あるいは苦悩からの解放など。様々なものが考えられるが、要は自らの主張を通すための手段として死を選択するものである。

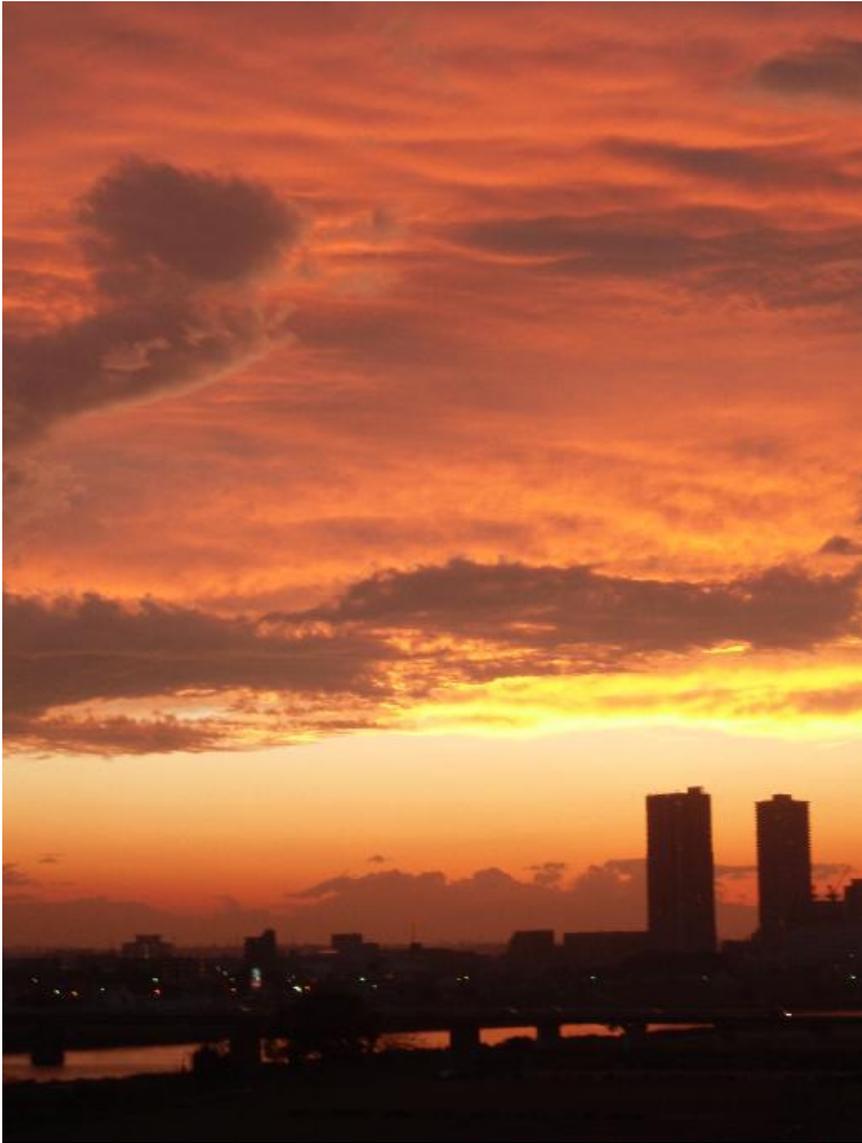
私の描く安楽死とは、そうした自己主張のための手段ではなく、単に睡眠から醒めないようにしてほしいという、生の終結への単純な願望なのだ。

私は、自分のホームページにも述べているように、人生のスコアカードというものを念頭に置いて、退職後の生活の質（QOL）を高めるべくそれなりに努力をしてきた。自分でいうのも変だが、私のQOLは今のところかなりのレベルに保たれていると感じている。このままの状態で私の人生を閉じることができるとしたら何の躊躇いもない。但し、その時期については自分で決定したい。自分の知らない間に不意に幕が閉じられるというのは納得できない。

私の父は七十四歳で他界したが、七十を過ぎた頃には既にアルツハイマー病の症状が顕著であった。そのDNAを受け継いでいる私が、突然、認知症に襲われても不思議はない。そのような事態になれば、自分のQOLは地に落ちてしまうだろう。同時に、周囲にも迷惑がかかるだろうし、地に落ちてしまった生活の質を守るため国の貴重な医療費を使わせて頂くのも決して本意ではない。国の医療費は、今や三十兆円に達し、歳出の三分の一を占め、しかも、その大半が高齢者に支出されているのだ。

先年、植物状態になった妻の介護をしながら時として頭に浮かんだのは、もし妻に意識があれば自分の置かれた状況をどのように評価するだろうか、という疑問であった。必ずや、直ぐにでも旅立たせてほしいと切望したのではないだろうか。

意識がなくなれば、人間は動物と同じだ。生存本能だけに支配されて、無意識の中に生きるための飽くなき戦いを続け



る。だが、その戦いにどれほどの意味があるというのか。
七十年前の私の素直な疑問は、切腹を安楽死に置き換えて
みると、現在の気持ちにも通じるものがあるかもしれない。
「ねえ、未だ安楽死って、できないの？」
(了)

〔二〇一二年六月記 原稿用紙約四・五枚 課題「斬る」〕